



四ッ橋味

交樂齋

十二月發行

人形淨瑠璃

勝ちぬく誓言

みたみわれ 大君にすべてを 捧げまつらん
みたみわれ すめらみくにを 護りぬかん
みたみわれ 力の かぎり 働きぬかん
みたみわれ 正しく 明るく 生きぬかん
みたみわれ この大みいくさに 勝ちぬかん

人形淨瑠璃

— 演出總形人・線味三・夫太 —

(部 の 畫)

狂通
言し
平假名盛衰記

大神 辻逆松笹大
崎法 右津
揚 橋衛引宿屋
印 門 内のの
屋 の の の
の の の の

段段段段段段

盲杖櫻雪の社

三人座頭の段

(部 の 夜)

玉藻前旭袂

お清十郎 夏壽連 右大臣道春館の段

平家女護島

鬼界ヶ島の段

新 鶴澤都陸平八 振作付曲
釣
女

昭和十八年十月三十一日 初日
初日 晝十一時・夜四時
每日 晝十二時・夜五時 二部開演

・御觀覽料・

畫の部

一等 席 圓五十錢
二等 席 圓三十錢
三等 席 圓二十錢
夜の部
一等 席 圓五十錢
二等 席 圓三十錢
三等 席 圓二十錢
(各等入場稅別)

夜の部

一等 席 圓五十錢
二等 席 圓三十錢
三等 席 圓二十錢
夜の部
一等 席 圓五十錢
二等 席 圓三十錢
三等 席 圓二十錢
(各等入場稅別)

◇ 初日各等約二割引 ◇

一等御座席 是五日前より

一等椅子席 是五日前より

前賣切符發賣致し居ます

前賣切符專用電話 南(75)四七壹番
一般御用の電話 南(76)三〇三番
南(76)三七八番

大津宿屋の段



駒若君	番場忠太	清水屋亭主	山吹御前	女房	親	鎌田隼人
(竹本)	豊竹	(竹本)	(竹本)	およし	権四郎	竹本
越文字太夫	松島太夫	津磨太夫	八十太夫	豊竹	伊勢太夫	叶太夫
				千駒太夫	伊勢太夫	伊勢太夫

【畫の部】
 狂言 平假名盛衰記

大津宿屋の段
 笹引の段
 松右衛門内の段
 逆櫓の段
 辻法印の段
 神崎揚屋の段

この淨瑠璃は源平盛衰記によつて旭將軍義仲の没落、高綱と源太の宇治川戰陣争、逆櫓、飯の梅のこと等を取入れて趣向したのがこの平假名盛衰記です。

梗概

大津宿の段

山吹御前、駒若、鎌田隼人、お筆諸共の桂の里を遁れ、木曾路を志して旅に出た。粟田山、日の

人形役割割

山吹御前	駒若君	お権四郎	船頭権四郎	女房およし	悴房植忠	番場忠太	清水屋亭主	村の水屋	取の歩	鎌田隼人	笹引の段
桐竹紋司	桐竹小紋	桐竹光龜	桐竹政龜	吉田小兵衛	吉田龜夫	吉田玉徳	吉田多郎	吉田駒三郎	大田ぜい	吉田多三郎	
隅若太夫	司若太夫	豊竹司若太夫	鶴友太	鶴友太	鶴友太	鶴友太	鶴友太	鶴友太	鶴友太	鶴友太	
竹澤團六	竹澤團六	竹澤團六	竹澤團六	竹澤團六	竹澤團六	竹澤團六	竹澤團六	竹澤團六	竹澤團六	竹澤團六	

岡峠、諸羽宮を過ぎ、義仲が、戦死した粟津が原を望んで涙に暮れ、逢坂の關の清水、追分を越えて、大津八町の清水屋に泊つた。順禮姿の色黒い老人(権四郎)が娘およし、孫植松を連れ、これも清屋に來て山吹御前の隣室に泊る。そして兩室の幼兒が同時に泣き出したので、その機嫌を取る間に互に懇意になつた。そして色黒い老人は攝州福島の船乗りであつた植松の父が死んだので後婚を迎へ、西國順禮に出たものであることが知れ、冗談交りの話に興じながら晝間の疲れで皆寢入つた。その後暫らくして駒若、植松の兩兒が共に目覺めて室内を歩き廻り、行燈を引張り合ふ拍子に燈火が消えて、兩兒共に泣出した。その聲に眠れる者どもが目を覺した折柄、番場忠太が大勢を引連れて亂れ入つた。旅舎に寢てゐる者どもは何事が起つたかと驚き、逃げようとして闇の中を物に當り惑ひ、大騒ぎとなる。

人形役割

竹本 雛太夫
豊澤 寛治郎

笹引の段

鎌田隼人	吉田多三郎
山吹御前	桐竹紋司
お筆	桐竹光造
番場忠太	吉田玉徳
駒若君	桐竹小紋
取巻	大ぜい
松右衛門内の段	竹本大隅太夫 鶴澤清八

空曇つて風烈しい夜道を踏んで、山吹御前の一
 行は相宿の者と諸共に逃げ出でたが、お筆が奇手
 を追拂間に隼人も山吹御前の抱いてゐる幼児も殺
 された。お筆は跡戻りして愁歎に暮れる。そして
 山吹御前をいたはりながらよく見れば、殺された
 幼児が槌松なので、喜んで山吹御前に之を知らせ
 る。山吹御前は「あまりうろたへて相宿の子と取
 違へたか」と、いふ聲も細り行き、驚怖と過勞と
 の爲に絶命した。お筆は當惑に暮れながら路傍の
 藪の笹を切つて死骸を乗せ、急いで之を引き行き
 心ばかりの野邊の葬りを済す。かくて死児の笈摺
 に記してある居所を便りに、駒若を尋ねて福島さ
 してたどり行く。

人形役割

船頭 権四郎
桐竹 政龜

松右衛門の段
逆櫓の段

福島とは名のみ豊かな難波潟、こゝは磯村の殊



座頭 松右衛門 吉田玉助
 女房 およし 吉田小兵吉
 お 筆 (吉)桐田光龜 松造
 駒 若君 桐竹小紋
 逆 櫓 の 段

竹野豊野 住太
 本澤 仙呂 太三 太郎
 夫 夫 夫 夫

人形役割割

船頭 權四郎 桐竹政龜
 女房 およし 吉田小兵吉
 船頭、松右衛門 實へ樋口次郎 吉田玉助
 船頭 又六 吉田兵次
 船頭 富藏 吉田藤一

に目當の松一本ある片廂の門口は船頭四權郎とて其通名の松右衛門と云ふは婿に譲つて頑固にはびこる老爺が家。今齋坊主や講中が寄つてゐるのは今日三年忌の前の婿の話、今の松右衛門殿はござつて間も無く、などの話から權四郎は尋ねられるまゝに、此間の觀音詣りに大津の八丁で泊り合せたにはかの捕物騒動、つひ取違へてきた此子供、尋ねてゆかう頼りも無く、早う向ふから孫の槌松を伴れてきてくれれば好いがと、大事に育てゝゐる次第を語る。そこへ此客人達と入れ違へに當の松右衛門が歸つてくる。

そして今日召出された梶原の邸での首尾を語つて、有難や老爺様から教はつた逆櫓をもつて愈々御大將義經公の船頭に成れさうだ。日暮れから梶原の船頭達と稽古して成就すれば其梶原様の御取持にて立身出世は今眼の前と勇むから、權四郎も女房のおよしも大ひに喜んで船玉様へ燈明したり松右衛門は夕方まで勞れやすめと代りの槌松抱い

船頭九郎作 吉田常次
 駒若君 桐竹小紋
 島山重忠 吉田玉徳
 取巻 大ぜい

人形役割割

法印女房 桐竹紋太郎
 お筆 桐竹龜松
 辻法印 吉田光造
 菅原源太 吉田玉市
 梶原源太 吉田榮三郎

竹本七五三太夫
 鶴澤綱造
 豊澤猿二郎
 竹澤團作

て一間へと入つた。
 そこへ遙々と尋ねて來たのが外ならぬお筆であつて。つまり其夜の天津で油り合せた女中であつたから大騒ぎして喜ぶ權四郎とおよし、あの榎松は何故早う内へは入らぬぞ、其方の小供衆も大事にかけて虫一つ起させず立派に日を暮らさして居りますと自慢たらん、矢たらにお筆に禮をいふやら。お筆の胸はさながらに焼鐵當てられる思ひである。が、黙つてばかりも居られないので、取り違へた其お子は其夜に敢なく……と言ひ難きを言つて、どうぞ若君此方へ返して下されと、即ち此苦しい切ない心こそやがては榎松様が未來のため、佛千體建立するより供養にも成りませう程にと、色々にかき口説くが、あまりの事に吃驚して悲しさに唯およしは泣くのみ。權四郎は、あの襖に張つた大津繪こそ、榎松が旅でねだつて買つたもの、其繪に孫が幸先祝うたも今は仇、みな夢に成つたかと世の義理を説き情を云ひ、悲しさは遂

庄 百 神
屋 姓 崎
大 吉 揚
田 田 屋
ぜ 田 の
い 兵 段
次 吉

人形役割割

母 梅 仲 や 揚 お 梶
圓 ケ 里 屋 原
壽 枝 居 手 主 筆 太
吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉
田 竹 田 田 田 田 田
小 光 常 龜 玉 龜 光 榮
兵 松 次 夫 男 松 造 郎
吉 松 造 次 夫 男 松 造 郎

鶴野竹豊鶴竹
澤澤澤本
一勝喜伊仙新重南
郎右太左達三太部
衛衛衛太太太
門郎門郎郎造夫

に憤怒を生んで、町人でこそあれ孫めがかたき、其方の子も今存分にしてから返そと、驚き留むるお筆はねのけ突立ちあがり。一間の障子ひきあくればこはいかに……

眠つてゐるとのみ思つた松右衛門が確りと其小供を護つてゐるではないか、突嗟にお筆は松右衛門と顔見合せて吃驚する。それに目交で何にも言ふなと押さへた松右衛門、どうかして老爺の怒りを宥めようとすれども、いつかな承知せぬ権四郎、つひには、血を分けたでない槌松ゆへのその水臭さかと、やぶれかぶれ、近所の若者どもをさへ呼集めようとするから流石の松右衛門も今はせん術無く、すなはちこゝに

此若君こそは誰あらう、音にも聞きつらん、旭將軍木曾義仲公が御公達駒若君、また我こそは其四天王の隨一、樋口次郎兼光なるは、と大音聲に名乗を擧げてしまふのであつた。

そしてなほ言ふやうは、我河内の國へ出陣の留守中に義仲公には敢なき御最後、あはれやれその

鑊慣を晴らさんものと先づ此家へは入婿の、さいぜんも言ふ通り逆櫓を言立はや梶原へ近付いたれば、御敵範頼、義経を討たんも今の間、それにつけても若君には如何、そも何方にかおはすらんと

今の今まで案じ暮らしてゐたりしに此仕合せと、侍女お筆が女ながらも健氣なる振舞を褒めたゝへるにつけても顧みれば我が子、それとて義理の子榎松が思ひもかけずその若君の御身代りと成つた忠義さ、われの忠義を天もあはれみ給ふか。これとて結句親父様のおん蔭、もとより榎松は身にとつては義理があり、子であるといふても子では無く、親父様のおなげきも堪へられねど、一旦親と成り子と呼び又夫婦となる之みな定まりごと、人は武士、爺や親の名を擧げてくれた榎松とこのところはどうぞ思しあきらめて、若君の御先途見届けさせて下されと、何卒私に忠義を立てさせて下されと、君を思ひ又子ならぬ子を偲ぶ松右衛門が熱血こもりし誠心に、一度は事毎に意外の感に撃たれてゐた権四郎も、そこは頑固ながら律氣も

のいまは全く樋口の心に同情して、俺も武士の親に成つたのだと、勇むにつけても、まを思ひは何うしても孫榎松の跡を追ふ涙。

さて、お筆も事の成行を見て今は安堵の胸なで下し、権四郎父娘が嘆き他に見るでは無けれど、而も自分は尙先を急ぐ身の、妹も尋ねたく、また主親の仇も討たねば成らず、若君と別れまゐらして親娘が留むる袂を拂つて、匆々にして出立する。

空元氣は出しても、お筆の振舞に今更感心してあれ身習へそちも武士の女房に成つたのではないか、と娘の涙はたしなめて見ても、権四郎の力が抜けたのを見兼ねた樋口は、逆縁ながら榎松の菩提など弔ふておやりなされと慰める。

渡りに船と老爺はおよしとも、佛壇に向つて涙あらたである。

夕暮の鐘が鳴る。

と、約束の船頭又六、富藏、九郎作たちが甲斐甲斐しい仕度して松右衛門を呼びにくる。いよいよ逆櫓の稽古にゆくのだ。

唯見る満々たる海上、一艘の小船の中で松右衛門を師匠として梶原の船頭たちが逆櫓の稽古をしてゐる、掛聲さへも勇ましく。と、どうしたのか不意に船頭達は松右衛門を圍んで之に打つてかゝるのであつた。松右衛門また之に應じて敗けては居ない。計る積りの松右衛門は却つて自分が計られてゐるのを知らなかつた。松右衛門實は木曾の殘黨、それも、聞ゆる勇者樋口次郎なる事は既に梶原が氣付いてゐたのだ。

即ち逆櫓に事寄せ、却つて之を捕へようとする梶原が手配であつたのだ。

辻法印の段

梶原景季は勘當を受けて千鳥と共に攝州に來り千鳥は神崎の遊女に身を沈めて梅ヶ枝と名乗り、景季は加島の辻法印の家に身を寄せてゐる。お筆は妹の行方を探ねて辻法印の所に立寄り、占を請うて去る。後に景季が歸り法印と言合せて尼ヶ崎大物浦の農夫から雜穀を詐取し法印と共に之を擄つて神崎へ行つた。

神崎揚屋の段

旭將軍木曾義仲の侍女お筆の妹千鳥は敵方の梶原平三景時の屋敷に腰元奉公に上り、景時の嫡子源太景季といふ鎌倉一の風流男と戀仲になります。景季は宇治川の先陣争ひに義理で佐々木高綱に先陣の功名を譲つた不覺から切腹すべき處を母の延壽の慈悲で千鳥と伴に勘當となり、千鳥は源太景季を養ふ爲めに神崎の千藏屋へ梅ヶ枝と名乗つて身を沈めます。源太は勘當の雪辱に一の谷の合戦に華々しく出陣したいが頼朝公より拜領の鎧を三百兩で入質してゐるので、其金子調達の爲め梅ヶ枝も胸をいため夫の爲なら此身を割いてもと、兩人苦しい瀬戸際にふと思ひ浮かべたのは小夜の中山無間の鐘の故事であります。思ひつめた念力で手水鉢を鐘にぞこゝ打たんとしますと二階から母延壽の情けで三百兩の小判が降つて來ます。そこへ千鳥と源太は仇同志とされますが母延壽の自害で心もとけ景季は勇しく出陣する。

盲杖もう じやう 櫻ざくら 雪ゆき の 社やしろ

三人座頭の段

(床本) 三人座頭の段



三人座頭の段

玉	徳	福
の	の	の
市	市	市
(豊竹)	(竹竹)	(竹豊)
竹本	本本	本竹
司隅	越文字	濱つばめ
太若	太太	太夫
夫夫	夫夫	夫夫

何事も辛未の明の春、盲杖櫻糸にして人丸様のみやしるに、雪白妙の朝霧も、晴れるや注連の飾り蝦、位取りとて都をさして急ぐ道さへ冬の空危い所をヲ、サ合點ぢや野梅山、梅香を聞く計り名所古蹟も知らぬが佛、探りくゝて急ぎ來る、何と徳の市福の市コウ三人連立て官を貰ふて逝でから仲よふしやうぢや有るまいか、ヲ、コリヤ玉の市の云通り長の道中連立も他生の縁でも有ふかいしかし福の市は足弱で世話がやけるで困つた事、ア、コレ徳の市其様に足べたをそしる者じやないわい、其替りおれに一ツの隠し藝在所踊りをうさはらしにちよつと踊つて、ア、ウハ、、、聞かしてやろうかい、コリヤ面白く我等も俱に一踊り、サアく早ふに福の市は扇をしやんと座を構え、沖の白帆の雲隠れ春は曙の朝景色、ちよ

人形役割

徳福玉

ののの

市市市

桐竹

龜

松

吉田光造

吉田光造

吉田玉市

鶴	豊	豊	鶴	野	野	豊	豊	竹	竹
澤	澤	澤	澤	澤	澤	竹	竹	竹	本
寛	仙	廣	新	友	八	千	富	宮	難
			三	十	之	駒	太	太	太
子	松	若	郎	郎	造	輔	夫	夫	夫

つと此目が明石湯、我にも見せよや人丸の社は和歌の守神、おいらもちよつとはなる口の杓とふの見すがらにのみかはしたる大瓶の酒が言はする口拍子、按摩疳癖針とふくくの朝は迅ふからおちこちの流渡りの大井川、連臺ならぬ肩車、我手で諷ふ小寶ぶし、一に權現ナア、へ二に玉津島、三に下り松ナア、へ、四に鹽釜よ、天の橋立切戸の文珠文珠様はよけれ共、切戸の文字が氣にかゝるく来るかくと濱へ出て見ればノウホイ濱の松風頃やまさるサヤとかけのホイ、眞赤となすいた水仙すかれた柳のホイノ心せきちく氣は紅葉、サアトカケマツカトナ池のくエ、鱈めが朝日に輝く夕日になびく眞菰の小影にちよつと出ちよつとはね二度サ出てはねた、ヤレはねたがどうすりや鱈と娘ははねたが賞玩ハレワイヤコレワイサノ田舎踊り面白さ早入月に花に風ねぐらを急三人連杖を力にたどり行く。

右大臣道春館の段



竹野本相
 竹本澤吉生
 澤本澤吉生
 團織五郎
 太夫
 六郎

【夜の部】
 玉藻前旭袂

右大臣道春館の段

寶曆元年正月豊竹座に上演されたもので殺生石の傳説を題材とし、鳥羽帝の御兄薄雲王子の反逆と妖狐の化現玉藻前とを取合せて趣向を凝らしたる作で五段ものである。この段は三つ目で俗に(玉三)と稱されてゐます。安田蛙桂が立作者で淺田一鳥浪岡橋平が合作してゐますが後に文化三年三月廿六日より御靈芝居に於て佐川藤太梅枝軒が添削なし上場太夫は初代豊竹巴太夫が三の切、口は豊竹泉太夫が語り好評を博したもので此度上演も當時増補されたものであります。

梗概

右大臣道春の娘桂姫を蓄雲王子が懸想して侍姫に迎へようとしています。桂姫には安部采女之助といふ侍と想思の仲にあるので請入れませぬ、王子は

人形役割

腰	初	娘	萩	采	鶯
	花	桂	の	女	塚
元	姫	姫	方	の	金
				助	藤
大	桐	(吉桐)	桐	吉	治
	竹	田竹	竹	田	
せ	紋	田光	政	玉	玉
		龜	龜	男	助
い	司	造松			

眷戀の情に驅られて腹臣の金藤治を遣はして、桂姫が應じなければ家寶の名劍獅子王を出せと難題を言かけます。獅子王の名劍は既に何者かに盗まれてゐるので詮方なく桂姫の首を遣る破目になつたが桂姫は後室萩の方が實子ではなく五條坂で拾ふた捨子であるので心が咎めて討つ事が出来ず妹の初花を身替りに討たうとしたが追に之れも恩愛の絆にひかれて又が鈍るので双六盤を姉妹に侷めて勝負をさせて何れかを討たうと苦肉の策を思ひつきます。姉妹は互に死を譲りあひましたが遂に桂姫が勝つて、初花姫が討たれる事になり、首をさし延べましたが金藤治は意外にも勝つた桂姫の首を討落しましたので萩の方は怒つて鶯塚詰ります。後室に懇と斬れた、金藤治は初めて本心を明し桂姫の實父であることゝ名劍を盗んだのも自分であると苦しい息の下から自白します。勅使が来て妹の初花姫の歌才が天聴に達し更衣の官に召抱へられるといふ筋合で御座居ます。

湊
町
の
段



後 前
 豊竹 豊野 竹
 澤本 澤竹 澤本
 廣重 仙呂 吉佳
 太 太三 太
 助 夫 糸 夫 郎 夫

お夏 清十郎 壽連理の松

梗 概 湊 町 の 段

姫路の奉公先で主家の娘お夏に思はれた清十郎は、主家の若旦那でお夏の兄の徳次郎が、島の内の土佐屋の小半と馴染み、身代金のことから、親佐次兵衛と俱々力を合はせてかばふ。

お夏がわざ／＼清十郎の後を慕ふて來るので、清十郎とは末は女夫の約束あるお梅が恩と義理に金の調達のため乳守へ身を沈める事になるが、お夏の立野へ嫁入が破談になつた結果家が圓くおさまると徳右衛門が馳け付け、お梅は往かずに濟み徳次郎小半は夫婦になつて家督を相續し、お夏は清十郎、本妻お梅は妾となつて皆な芽出度く堅まるといふお夏清十郎浮名の譚りです。

人形役割

土佐屋半六	母おかね	小半	お梅	太左衛門	清十郎	徳次郎	親佐次兵衛	徳右衛門	お夏
吉田兵次	吉田多三郎	桐竹紋司	吉田榮三郎	吉田玉徳	吉田光造	桐竹紋太郎	桐竹門造	桐竹政龜	桐竹紋十郎

文樂座小史(昭和十八年調査)

- 竹本座創立(現今ヨリ二百五十九年以前)
貞享元年二月(道頓堀西ノ芝居)
- 文樂座發祥(現今ヨリ約百五十年以前)
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地演時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

僧海瀬丹丹平雜郎

都女尾左波

俊千太衛少判

寛鳥郎門將官色黨

吉田榮 吉田文五 吉田門 桐竹龜 吉田玉 吉田玉 大田ぜ 大田ぜ

三郎造松市徳

人形役割割

鬼界ヶ島の段

豊竹古靱太夫 鶴澤清八



平家女護島

鬼界ヶ島の段

本曲は近松門左衛門の作で享保四年(二三七九)八月十二日初日で竹本座に上演されたもの、全五段よりなり鬼界ヶ島はその第二段目に當つてゐる。全曲は平重衡南都焼討の凱旋に筆を起し、清盛横暴の極、俊寛の妻あづまや成經の情人千鳥を虐殺した崇で熱病にかゝつて悶死の事、鬼界ヶ島流人の生活とその赦免歸洛の状(この件りは謡曲「俊寛」による)、牛若女装して常磐の館に入り共に心を合せて源氏一味の徒を糾合する事(千姫の吉田御殿の巷説を取り入れ、朱雀の御所は女護の島と外題もこゝから取つてゐる)、宗清父子の苦節に文覺上人源氏の蜂起と平家滅亡の經路を夢みるまでを描いたもので後年、吉田冠四、近松半二、三好松洛等により改作「姫小松子日の遊」(寶曆七年二月二四一七)竹本座初演)も生れた。



位寛僧都

御座る

舟元 康

舟の 判官 康

成経 舟師

白鳥 舟師

尙、この鬼界ヶ島の段は昭和五年一月四ツ橋文樂座の落成記念興行の際、現櫓下豊竹古靱太夫により四十年振りに古曲復活の意味で上演したことがあり、その後此度が第二回目の上演である。

梗概

驕る平家を滅ぼさうとの鹿ヶ谷の密謀が顯はれ俊寛僧都は丹波少將成經、平判官康頼と共に鬼界ヶ島へ流された。

夫れから三年の月日は經つた。

憂き艱難の中にも戀はあつて、成經が海女千鳥と契つた話を俊寛は康頼から聞くと、憂き年月に珍らしい笑を浮かべつゝ成經と千鳥を招き、何れ赦免の沙汰もあらば丹波少將成經が北の方とも仰がれようと、心から祝ふのだつた。

折から此島目指して漕ぎ寄る船——。

やがて瀬尾が船より下り立ち、懐中の赦免狀を取出して此度中宮御産の御祈禱に非常の大赦行は

れ、鬼界ヶ島の流人成經、康頼を赦免すと讀み上げるが、俊寛一人は赦免狀に名が見えないので驚き悲しむのだつた。

然し、その時、丹左衛門尉元康が靜かに進み出て、特に小松内府の計ひにて、俊寛をも備前國まで召還さるゝ旨を告げるので、三人は手を取り交はして嬉し涙に暮れたが、急ぎ立てられて船へ乗らうとする。

千鳥も共に從ふのを瀬尾は慌てゝ遮り、成經が仔細を明して頼んでも、俊寛が口を添へても頑として聽かず、剩へ、俊寛の妻あづまやが清盛の意に背き非業の最後をとげた事などを憎々しげに語るので、今更都に還へつても何かせんと、矢庭に瀬尾が持つた刀を奪つて切り倒した俊寛は、千鳥を急ぎ立てゝ船に乗せ、自分は上使を討つた科に依り島に残ることゝなる。

浪間を遠去かる都の使ひ船。

哀れ——荒磯邊の岩角に見送り叫ぶ俊寛。

濱千鳥が無心に鳴いて飛んで行く……。

(佐和利) 鬼界ヶ島の段

不便や濱邊に只獨り、友なし千鳥鳴きわめき、武士は物のあはれ知るといふは偽り虚言よ、鬼界ヶ島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日より御免の便り聞かせてたべと、明日を拜み龍神に願立て祈りしはつれて都で榮耀榮華の望でなし、簀虫の様な姿をもとの花の姿にして、せめて一夜添寝して女子に生れた名聞と一つはの樂みぞや。エ、むごい鬼よ、鬼神よ、女子一人乗せたとて軽い船が重からうか、人々の歎きを見る目はないか、聞く耳は持たぬか、乗せてたべなう乗せをれと聲を上げ打ち招き、足ずりしては伏し轉び人目も恥ぢず歎きしが、海上の身なれば一里や二里の海怖いとは思はねども、八百里九百里が泳ぎも水練もかなはねば、此の岩に頭を打ち當て打ち碎き、今死ぬる少將様名残り惜しいさらばや念佛申すむぞうか者、りんによぎやアつてくれめせと泣くく岩根に立ち寄りれば、やれ待てくと俊寛よろほひく絃を漸うまるび走りより、これ船に乗せ

て京へやる、今のを聞いたか我が妻は入道殿の氣に違うて斬られしとや、三世の契りの女房死なせ、何樂みに我一人京の月花見たうもなし、二度の歎きを見せんより、我を島に残し代りにおことが乗つてたべ、時には關所三人の切手にも相違なくお使にも誤りなし。世に便りなき俊寛我を佛になすと思ひ、捨て置いて船に乗れくと泣くく手を取りひつ立てくと御兩使頼み存ずる此の女乗せてたべとよろほひ寄れば。



鶴澤道八作曲
棋茂都陸平振付

新曲 釣つり 女をんな

狂言の「釣女」を本として河竹默阿彌が作った常磐津の有名なもの、筋は大名と太郎冠者が未だ定る妻がない故、現福者と聞き及ぶ西の宮の恵比壽三郎殿に妻を申受けたいと祈念をこめる、夢にお告があつて釣竿を授り各々妻を釣り上げてかつぎを取つて對面すると大名は美しい上臈、太郎冠者は世にも醜い醜女を授る、太郎冠者は上臈の手をとつて走り行く。

(床本) 釣 女

醜	美	大	太
ツ	女	名	郎
(豊)	(竹)	(竹)	(竹)
本竹	本竹	本竹	本竹
濱	南	宮	織
太	部	太	太
夫	太	太	太
夫	夫	夫	夫

〱抑是は猿樂の昔よりして其業の可笑といひし狂言師名に大藏や鷲流の容を寫す釣女へかやうに候者は此所の大名でござる。ヤイ、太郎冠者あるか、ハハ、有るか、ハハ、御まへに、へ居たか、ハハ、へねんのう早かつた汝も知る如く此年迄定まる妻がない承れば西の宮の恵比壽三郎殿は福者と申事はへ参り妻を申受けうと存ずるが何んとあるぞ汝供をせい、誠に仰せの如くでござる西の宮の木びす三郎殿へ参るがよぶござりませう

醜美大太

郎冠

人形役割

女女名者

桐吉吉吉
竹田田田
紋榮玉榮
十三助三
郎郎助三

(鶴野澤)	(鶴野澤)	(鶴野澤)	(鶴野澤)	(鶴野澤)	鶴澤	鶴澤	竹本
重	喜	團	團	錦	市	友	道
左	伊	五	五	次	次	右	文
衛	衛	平	平	友	友	衛	太
門	門	六	六	三	三	門	太
造	造	郎	郎	郎	郎	八	夫

私も定まる妻がござりませぬ。次手ながら申受ませう。
 へ扱へ己はそつじな事はいふものぢやゑびす三郎殿と
 こせいへきびす三郎と申事があるものではない。へハテ
 繪にかいた折はゑびす三郎と申す木で造つた折は木びす
 三郎と申す。へなうへ汝は物知りでおじやる某は
 道不案内じや程に名所舊蹟を語り聞せよ。へ畏つてござ
 る。へ去らば急いで参まうサアへ来いへ。へ参りま
 すへ。イヤなうへ頼ふたお方先参る程に是がはや
 へ小唄に諷ふ奈良法師行も戻るも心のとまるも山崎の
 へ女郎と涅槃の長枕結ぶ縁しの尼ヶ崎。へアハハハハ
 ヤ面白いへシテ向ふに見ゆる山は何山じや。へハテあ
 れは山でござる。へ愛な申か山は山じやが何と申。へハ
 ア何山はエ、山でござるヲ、それへ。へあんの山か
 らこんの山へ飛で出たるは何者ぞ頭にふつふと二ツ細ふ
 て長ふてりんとはねたをちゆつとすいた。へ兎じや
 へ何を申ぞシテ西の宮はまだか。へ最早此森の内でござ
 ります。へ去らば参詣を致そうてうずへ。へハア
 へ先罎口に取りつかふぢやぐわんへ。いかに申上候へ我
 此年迄無妻なり。へ三郎殿の利益にて定まる妻をさづけ
 たまへ。へ授けたまへと一心こめて伏拜む。へヤイ太郎
 冠者汝もおがめ。へ畏つてござるぢやぐわんへ。いかに
 木比壽三郎殿へ申候。へ我も定まる妻はなし似合相應美

しき妻をお授け〜と三拜九拜したりける。ハヤイ太郎冠者今宵は通夜をせう汝もまどろめ。ハ畏つてござる。ハアラとうとや。ハ内陣の内ぞゆかしき我妻を千代と契らん手枕の袖を覆ふてまどろみしがほどもあらせず夢さめて。ハヤイ〜お告があつた。汝が妻になる者は西の門の一の階にあらう程に連て歸れとお告が。ハはいかな事私がお告も其通り。ハいそいで参らう。ハ参ります。ハ勇み悦ぶ足元に落たる竿を取上て。ハヤこれはいかな事妻ではなふて竹の先に糸が附てあるこれはなんであらうぞ。ハハアふしぎなお告でござりますな。ハイヤ是はさとつた惠比壽殿はふだん釣竿を放さず釣斗りしてござるによつて此針で妻をつれといふ事であらう、先急ひで釣ませうエイ。ハ釣ろよ。神の教への釣針をおろしめよき妻をつらうよ。ハ針をおろせば。ハ針をおろせば。ハヤイ。太郎冠者か。つたわ。ハ何か。ハ何か。ハ逆も。ハおもい女ぢやチヤット来て腰を取れ。ハ心得ました。ハハアテそれがしではないお妻さんの腰を取れ。ハ心得てござる、ふしぎやな氣高き女を釣上て。ハアラ有難や扱も能い妻がか。つてござるうれしや。ハ何が扱お悦びでござる。ハこれ

〜そなたは定まる妻じやによつて目を掛けてやる程に夫を大事にしませうぞヤ、小野の小町か楊貴妃かアラ美しや。ハイヤゆく道々こつそり樂まうと春中へ入て來た此吸筒お二人さまの三々九度はにて目出たら御祝言、ハヤこれは一段の事じや、サア〜つげ。ハ心得てござる。ハ先女子の方よりさしませい。ハ心得ました。ハ申我夫必ず見すて、下さるな。ハなんの見すて、よひものか。ハヲ、嬉し。ハ太郎冠者祝して一ツうたふてくれ。ハ畏つて候。ハ高砂や此盃が二世の縁神の御前で祝言は三郎さまがお媒人よしそれとても浮氣心が有ならほんに罰が當るであらうぞいな、必ず見捨て下さるな、やいの。〜と寄添ば。ハ傍に聞居る太郎冠者氣をのみあせり。ハヤ申。其釣竿を私にお貸下され見事釣て見せませう。ハ早ふつれ。ハイヤ釣る段ではござらぬまづお二人様はそれにて御見物下さりませ。マツ〜。エイ。ハ釣ろよ。釣る物は何々鯛に鯉に惠方棚に撞鐘信田の森の狐にあらぬ釣針をさげておろして二十二相揃ふた十七八を釣らうよおかつさんをつらうよ。ハ餘念もながき鼻の下、ヲ、當るぞ。どつこいメたと引上れば被衣目深にかつぎし女アラとうとや掛つたい。ハサア〜

こちらへござれ嬉しや〜 へサア〜是からは三々九
 度の盃じゃこれへござれ何も恥しい事はないそなたと夫
 婦になるならば春は花見夏は涼み秋は月見の酒盛に冬は
 雪見のちん〜鴨天にあらば比翼の鳥地に又あらば連理
 の枝かならずそもじはかはるまいな〜なんの變つてよい
 ものかな へサテもよい妻を釣た物かなヤイ〜太郎冠
 者此兩人のお妻様に汝が國の舟歌を歌つて聞かしてやれ
 へ長まつてござる へ次手に手振りもして見せい へヤ
 ア心得ました、沖で降見りや三上の櫻とサ、枝をこんき
 りこつと、どうらんに付て忍び殿様にぶら〜んと提げさ
 せふかないな、花によりにたサモ風俗はようそる、そつと
 せいなびかんせ へサテ〜面白い事ぢやヤイ〜太郎
 冠者汝が妻も被衣を取らしませ へなにがさて餘りの嬉
 しさに顔を見る事を忘れておりました、サラバ一寸と御
 面像を へ被衣をとればこはいかに腹に等しき醜女ゆゑ
 へヤアワゴリヨは鬼か化物かなう消てなくなれ〜
 へなう〜我夫今おつしやつた楽しみは嬉しふて〜わ
 たしや忘れはせぬわいな へアヤレ情ないゆるいてくれ
 へ〜そりやつれなひぞへ太郎冠者どの へコレこつ

ちら向んせエ、何じやいなア へ思へば深い戀の淵しづ
 む我身を釣糸に結んだ縁の西の宮蛭子まうけて二世三世
 かはらぬ色は棹竹の末葉榮ゆく夫婦中放れはせじと取す
 がる へなう恐ろしや〜 へヤイ太郎冠者三郎殿の授
 たまひし妻じやによつて否應はなるまいぞ へア、そな
 た様は能い月日の下でお産れ相成た此太郎冠者は月も日
 もなく黒闇でうまれたと見へます へ何は兎もあれ目出
 たふ舞ふではないか へ勝手にさつしやれ へ高砂や此
 浦船に帆をあげて へ月諸共に舞の袖 へ女蝶男蝶の中
 もよく遠く鳴尾の沖の石堅い契りは住吉の千代に八千代
 をかけはしや千秋萬歳の千箱の玉を奉る目出たさよ
 へ目出たいな へ〜お目出たふござります へ某しが
 妻は何處へ參つたアレ〜太郎冠者が身共の妻を連れて
 行きをる、アノこゝな、おうちやく者 へナニ太郎冠者
 が美しくい女を連れて居たとナへ、腹立やくいさいてや
 る〜 へあのこゝなおうちやく者、やるまいぞ〜
 へ〜いさいてやる へやるまいぞ〜 へ〜いさいてや
 る。

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は

既に昔懐御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は

常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様の御期待に

背かねば、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居

りますが尚御す氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座ります。お預りは椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますから

お服物は成べく経済一基前に御受取願ひます。

貴重品は

各自にお持ち下さい。お席席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙室を備へてありますからお煙草はぜひ

此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店

二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

御休憩の間は

一階西側に給茶處と二階西側に大休憩所の設備が御座ります。辨當御持参の御方は何卒御利用下さい。

お出口は 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面

入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御中附け

下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひ

いたします。

出演者 銅氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤

めますから謹め御誠承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として

案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御覽賞會・又は諸種の御

會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上げる事に

致しました。御一紙次第書上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑧三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十八年十月廿九日開演
昭和十八年十月廿一日開演

大東市南區久左衛門町八番
松竹株式會社大阪支店

大東市南區久左衛門町八番
松竹株式會社大阪支店
鳥江

一 部 金 二 十 錢

